

タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2015 成果報告レポート

助成番号 15-1-2

プロジェクト名 ニコゼミ 2016 重い病気や障がいのある子どもに関わる人材育成のためのコミュニケーション講座の実施

団体名 認定NPO 法人ニコちゃんの会

所在地 福岡県

助成額 193万円

設立年 1992年

URL <http://www.nicochan.jp/>



（団体について）

当団体は、どんなに重い病気や障がいがあっても「その人らしい心豊かな人生を生き抜く」ことができる社会を目指し活動しています。芸術・研究・啓発・介護（日々の生活のサポート）など多岐にわたる活動を、障がい児の親をはじめとし、医療・デザイン・舞台・教育など幅広い分野のスタッフで企画・運営しています。

（助成による活動と成果）

本プロジェクトは、重い病気や障がいのある子どもと社会をつなぎ、医療福祉に関わる新たな人材を発掘・育成する取り組みです。重い障がいのある子どもと関わる機会の少ない人を対象に、見学1回、演習6回、実践4回のコミュニケーション講座「ニコゼミ 2016 最小で最大のコミュニケーションに出逢う!!!」を開催してきました。さらに、その集大成、追体験の場として、一般に向けてこの取り組みをアピールし新たな関わりを見出すイベント「あそぱくーニコゼミあそび博覧会ー」も受講生とともに創り上げ開催しました。

「ニコゼミ」の実践の中で重い障がいのある子どもと遊び、そこでの気付きや揺らぎをあそびを通して他者に伝える場「あそぱく」を経たことで、受講生にとって障がいのある人と関わるうえで『〇〇をしてあげる』ではなく『〇〇と一緒にする、そのために手伝うこともある』という姿勢を身体で理解できていたと実感しています。それは「障がい者」と「健常者」だった人たちが「あなた」と「わたし」の関係になり、それによってはじめてコミュニケーションが始まる大切な取り組みでした。1年間をかけて、じっくりとこのことを伝え、感じ取ってもらえたことは、技術や知識を得る以上の大きな成果であったと言えます。

さらに、「ニコゼミ」を通して知り合った障がいのある子どもと受講生の今後の繋がりも期待できたり、「あそぱく」によって視線入力など新たなコミュニケーションの方法に出逢えた子どももいたり、そここここのプロジェクトだけでは終わらない次の展開が多く見込まれる活動となりました。

（残された課題、新たな課題）

少しでも多くの人に、また医療福祉にかかわっていない人にも、参加して出逢ってほしいとの思いから、応募枠をほとんど制限なく詳細（職業や受講理由など）も聞かずに受け入れを行ったところ、当事者や医療福祉関係者からの応募も多数ありました。障がいのある本人や障がいのある人と仕事として関わっている人と普段関わっていない人が一緒に講座に参加することでみえてくるものもあれ

ば、同時にやはり齟齬もうまれました。また無料で気軽に参加できる単発参加も募集していたが故に、当日キャンセルや連絡がつかないなどが多くあり、運営面としても常識的にも疑問が生じる場面がありました。しかし間口を狭くすることで、限られた人しか関わることができないというのでは本末転倒です。今後どこまで詳細を聞くか、分けて募集するかどうか等、じっくりと検討する必要があると感じています。

（活動の背景・社会的課題）（団体からのメッセージ）

重い病気や障がいのある子どもの現状というのは、家族・特別支援学校の教師・医療・福祉関係者が多くを占めます。医療的ケアが必要になればなるほど、外出は困難になり、学校も通学ではなく教師が自宅に来る訪問学級になります。なかなか同年代の子どもとあそぶ機会は少なく、大人との接し方にしても、医療・福祉関係者とは生命や生活に必要なケアが中心で、深いコミュニケーションの時間はなかなか設けられません。

子どもは親や教師、まわりの大人によって様々な教育を受けたり常識を教わったりしますが、それと同時に他者と対等に接する中で、知恵や創造性、空気を読む力、他者を大切に思う心など、多くのことを学び成長していきます。そのような年齢に応じた人間関係を築きながら成長していくことが彼らには難しい状況にあります。

それから、彼らは身体的表現はもとより発語や表情にいたるまで非常に限られた動きでしか発信することができないため、発信がないものと捉えられていたり、感情や人としての尊厳を軽んじられることも、珍しいことではありません。彼らを取り巻く医療・福祉の現場でさえ善悪問わずそのようなことは日常的に起こっています。さらに普段から彼らと接することのない人が出会うとすればなおさらそうなることは必至です。

しかしながら、彼らは手術や医療的ケアによる身体的なストレスや、コミュニケーションの取りづらさ・制限のある生活による精神的な負荷を日常的に経験していることもあり、年齢以上の精神力を持っていることは少なくありません。さらに、指のかすかな動きや眼球の動きなど、最小の動きで最大限に人にメッセージを伝えることができます。受け手がそれに気づきしっかりと受け止めるスキルやきっかけさえあれば、彼らは人にメッセージの内容以上の大きな感動や喜びを与えてくれます。それは人と通じ合うことができるという人間本来の持つ欲求が付加価値となって、人に大きな気づきをもたらしてくれるのです。そのような彼らの最小で最大限の発信に気づき、また引き出し関わることのできる人材が、今後もっともっと必要になってきます。

医療の発展した現代、重い病気や障がいのある子どもが他者と対等に接し学びを得る機会と、彼らの発信に気づき関わることのできる人材の育成のふたつが、彼ら自身の人間的成長と多様性を認める社会全体の成熟にとって重要な課題であると言えます。

以上